

不安の時代—*The Bad Seed* の暴力

宮内 妃奈

1949年、核兵器独占という軍事的優位を誇っていたアメリカに激震が走る。ソ連の核兵器保有が明らかとなったのだ。アメリカの1950年代は、政治的緊張の高まりとともに幕を開けた。さらなる軍事強化を求めてアメリカが水素爆弾の開発推進を決めた1950年、William Faulkner はノーベル文学賞受賞スピーチで、戦後の政治不安に満ちた時代に生きる作家たちに警鐘を鳴らしている。

Our tragedy today is a general and universal physical fear so long sustained by now that we can even bear it. There are no longer problems of the spirit. There is only one question: When will I be blown up? Because of this, the young man or woman writing today has forgotten the problems of the human heart in conflict with itself which alone can make good writing because only that is worth writing about, worth the agony and the sweat. He must learn them again. (Underline is added.)¹

世界はそれからわずか数年で原爆を凌駕する破壊力を持つ「スーパー」を作り上げ、人類は漠たる不安と恐怖に晒されることとなる。世界情勢の不安はフォークナーが指摘するようにアメリカ文学にも大きな影響を与えるが、Nash は冷戦と原爆の不安が形を変えて、国内の若者のイメージに投影されるというアメリカ社会の現象を看破している。

¹ Cowley, p723.

Anxieties about the atomic bomb and the Cold War were transferred, as political anxieties often are, on to the image of the nation's youth, and many unquestioningly consumed the widespread story of teen behavior as a serious threat to postwar American society.²

まさにこの時期、8才の少女が連続殺人を犯すという衝撃的な作品 *The Bad Seed* (1954) が発表された。これは、“the problem of the human heart in conflict” について徹底的に追究したフォークナーと同様に、南部出身で “the root of the grim cruelty that lies at the heart of human life”³ について半ば「囚われた」かのように執拗に描き続けた作家 William March の作品である。マーチは1920年代から作家活動を始めているが、Waterman Steamship Corporation の副社長としての責務を果たす一方で作品を発表し続けた異色の作家で、1933年に処女小説 *Company K* を発表、それ以降約20年で6作の長編を残している。『悪い種子』は作家自身が「最悪の作品」と見做したのとは裏腹に発表されるや否やベストセラーとなり話題を呼んだ。当時のアメリカ文学界（Hemingway, Dos Passos, Welty, McCullers は直接手紙を送っている）からも称賛を得るとともに、ブロードウェイでの上演は300回を超えるヒットとなり、後にワーナー・ブラザーズによって映画化されることとなる。次作の創作に意欲的だったものの、マーチは『悪い種子』の発表直後に心筋梗塞で倒れ、この作品の成功すら十分に享受できないままこの世を去った。

マーチの伝記 *The Two Worlds of William March* の著者 Roy S. Simmonds は『悪い種子』とフォークナーの *Sanctuary* (1931) の類似性を指摘する。⁴ それによれば、どちらも6作目の長編で、人間悪のタブーに迫る究極の問題

² Nash, p76.

³ Going, p95.

⁴ Simmonds, p302-303. マーチ自身について研究されている著書は少なく、彼の経歴については本書を参照した。また、宮内 (2015) は *Company K* の前身となる1920年代の短編2編を取り上げ、マーチの描くリアリスティックな残虐性と現代に通じる普遍性について考察している。

作であり、作者の見解（最悪の作品）とは異なる世間の評価を得ている共通点があると言う。現代アメリカのモダンホラーの巨匠 Stephen King も、数ある小説の中からこの2作について同時に言及している。それは、エンターテインメント・ウィークリー誌（2009）の連載コラムで小説における“Top 10 Villains”は誰かという問いに答えたものであるが、キングは『サンクチュアリ』の Popeye と『悪い種子』の Rhoda Penmark を候補に入れたのである。⁵ ポパイもローダも形こそ違え、20世紀のアメリカ小説を代表する畏怖すべき悪の化身であるということであろう。

Chuck Jackson はこの「形」に着目し、マーチが描き出す悪に迫っている。彼はローダの悪が「体」（容姿）に歪みとして現れていないこと、特に“Evil is not only a child, but a little girl, and not only a little girl, but a little *white* girl, one who behaves perfectly—a darling child who plays the role of a little lady.”⁶ と述べ、小さな「淑女」である白人少女に表象されている点に、マーチの悪の異質性を読み取っている。

例えば、南部ゴシックの伝統的手法に従えば、フォークナーの悪の化身、ポパイが表す悪のアレゴリー⁷のように、見た目そのものから読み取れるのが主流であった。

...a man of under size, his hands in his coat pockets, a cigarette slanted from his chin. His suit was black, with a tight, high-waisted coat. His trousers were rolled once and caked with mud above mud-caked shoes. His face had a queer, bloodless color, as though seen by electric light; against the sunny silence, in his slanted straw hat and his slightly

⁵ <http://www.ew.com/article/2009/04/04/stephen-king-top-10-villains> を参照。

⁶ Jackson, p68.

⁷ ポパイの悪については、*Lion in the Garden* (53) に収められているミシシッピ大学で行われた1947年の質疑応答において、フォークナーは、ポパイは単に「悪の象徴」であり、すべてがアレゴリーであると述べるが、*Faulkner in the University* (74) に収録されている1957年のセッションでは、ポパイは悪の象徴であるというより「彷徨える人間」の一人であると言い、むしろポパイの人間性を強調した返答をしている。

akimbo arms, he had that vicious depthless quality of stamped tin.⁸

ポパイはメンフィスのギャングであり、いつも黒い服を着て、顔色が悪く、いかにも“vicious”な雰囲気醸し出している。彼は母親の胎内で性病（梅毒）に感染したため、生まれながらにして障害を持ち、性的に不能であった。作品の最終章で明らかとなる彼の出自は、犯罪に対する彼の遺伝的な影響を示唆しており、その点ではローダとの類似性を示すものである。（ローダの母方の祖母は連続殺人犯である。）ある日、自動車事故でオールド・フレンチマン屋敷（密造酒取引が行われているギャングの住処）に女子大生 Temple Drake が迷い込んでくる。彼はテンブルをトウモロコシの穂軸でレイプし、彼女を守ろうとした Tommy と、テンブルと逃亡しようとした Red の二人を射殺する。しかし最終的にポパイは、トミーやレッドの殺害容疑で逮捕されるのではなく、彼が関わっていない事件で容疑がかけられ、絞首刑となる。ポパイの代わりに、トミー殺しの罪は、彼とフレンチマン屋敷に住んでいたリー・グッドウィンに着せられ、グッドウィンはテンブルの偽証によって有罪となりリンチされて殺害されてしまう。彼の死も間接的にはポパイによるものだと解釈できるだろう。

一方ローダは、7才の時にボルティモアの有名な私立小学校から「窃盗」の罪で放校処分を受け、家で飼っていた子犬のテリアをアパートの3階から投げ落として殺し、自宅のアパートの上の階に住む老女を階段から突き落として殺す。老女殺害の動機は、彼女が持っていたオパールのパendantを手に入れるためであった。老女はローダが遊びに来るたびに、自分が死んだらpendantを譲るという約束をしていたのである。その後、ペンマーク家はボルティモアを離れ新しい土地に移動する。しかし、そこでもローダは期末最後の遠足で事件を起こした。その日は、年に一回の、生徒にとって最高の栄誉が発表される日でもあった。優等生のローダは“the most important prize of all, in the minds of the pupils, ...the gold medal awarded annually to the child who showed the greatest improvement in penmanship”が自分に与

⁸ Faulkner, p 34.

えられるはずだと確信していたのだが、彼女の意図に反してメダルは同級の同じクラスの少年 Claude Daigle に与えられたのだ。⁹ ローダはそれを自分のものにするまでクロードを執拗に追い回し、最終的には溺死させてしまう。しかしながら、これほどの事件を起こしても、ローダに容疑がかけられることはなかった。8才のあどけない少女の笑顔と彼女の賢い言動に騙され、人々は真実を見抜けないでいた。犬、老女、クロードの事件はどれも「事故」と判断される。すべての真相は、少年のメダルと凶器の靴を見つけた母 Christine によって明らかになる。しかし、その後も母はローダを止めることはできなかった。ローダは近所の整備員である Leroy Jessup (成人男性) を放火して殺すのである。彼はローダを見かける度に、クロード殺しに関する嫌がらせを言いローダを揶揄って楽しんでた。しかしながら、ローダが殺人に使った凶器を証拠として「手に入れた」と彼が嘘をついた時、ローダは殺しという手段を選ぶ。娘の悪行に悩んだクリスティンは、ローダを睡眠薬で殺害し、その後拳銃で自害するという選択に至る。しかし、二人の死によって「悪」(暴力)が消滅するという結末にはならない。ローダは近所に住むクリスティンの友人の Monica によって一命を取り止める。妻の死に嘆き悲しむローダの父 Kenneth (単身赴任で家を不在にしている) にかけられたモニカの慰めの言葉は、真相を知る読者には不気味に、無益に響く。

“You must not despair, Mr. Penmark, and become bitter. We cannot always understand God’s wisdom, but we must accept it. Everything was not taken from you as you think. At least Rhoda was spared. You still have Rhoda to be thankful for.” (217)

クリスティンの死によってすべての真相は葬られ、ローダは何も知らない人々の間で、「無垢の」少女の仮面をかぶって生き続けることが暗示されているのだ。

当時の読者の中には、この結末によって作品を連載だと勘違いした者がい

⁹ March, *The Bad Seed*, p8. 以後、本作の引用はこの版により、本文にはページ数のみを記す。

たという。また、映画版『悪い種子』では当時のプロダクション・コードによってローダは雷に打たれて死ぬというクライマックスに変更された。つまり、これは、悪が正義によって成敗されないまま生き永らえるという小説の結末が、50年代当時いかに斬新であったかを示すものであるだろう。

ポパイのようにギャングでも大人でもなく、また、当時表れつつあった“youth”世代でもない、¹⁰ほんの8才の少女がなぜこれほどの悪を投影する主体となり得たのか。少女が連続殺人を犯すというモチーフは、アメリカ文学史上、先駆的なものであった。¹¹ローダが象徴する悪は、「無垢」の仮面に隠れ、もはや全く目に見えないものであり、しかしながら限りなく身近に存在するということを意味する。ナッシュの言う「核の脅威」のアレゴリーとして解釈することもできるだろう。マーチは戦争体験がきっかけで作家になっており、世界の動向には常に関心を持ち憂慮していた。『悪い種子』においても、今の時代は侵すものが何もなくなるほど暴力に蹂躪され、「自分たちは不安と暴力の時代に生きている」(30)と男たちに語らせるほどである。しかし、ローダの暴力はむしろ、世界情勢だけに囚われぬ、フォークナーの提言する人間の心に迫るものなのではないか。先の男たちの話を聞いたクリスティンは、次のように「暴力」の潜在性を意識している。

It seemed to her suddenly that violence was an inescapable factor of the heart, perhaps the most important factor of all—an ineradicable thing that lay, like a bad seed, behind kindness, behind compassion, behind the embrace of love itself. Sometimes it lay deeply hidden, sometimes it lay close to the surface; but always it was there, ... (Underline is added, 30-31)

暴力は、「悪い種」のように、「親切」「同情」「愛」といった善の背後に常

¹⁰ Johnson は、20世紀に現れた文学の特徴として作家たちが「大人でも子供でもない」世代に着目しそれを主題として描いている、ことを指摘し、20世紀文学の“unique achievement” (4)としてその特徴をまとめている。

¹¹ Kincheloe, p164.

に存在する。このクリスティンの比喩は作品の題名とも重なっているが、遺伝による悪の継承という意味がタイトルの持つ一つの意味であるとすれば、暴力の存在そのものを表すアレゴリーとして、タイトルの意味を表していると解釈することができるだろう。

その身近にある「悪」（暴力）に我々はどうか対処できるのか。物語が悪の勝利で結末を迎えたことを考えるとマーチがそれに対して全く懐疑的であったと考察できるが、やはり、ローダに与えられている「1952年のアメリカに住む8才の白人の中産階級の女の子」という具体的な形を通して、作品を読むことが求められるのではないか。

1950年代のアメリカは、冒頭で述べたように軍事的恐怖に晒された時代であったが、国内的には、経済の面で個人の自由を行使することができる「豊かな」良い時代であった。「若い男女は、膨張する中産階級への仲間入りを熱望し、物質的な幸福を、とりわけ雇用保障という形の幸福を選択した。退役軍人援護法を利用して大学に通い、社会へ出たばかりの意欲的な若い復員兵にとって、安心とは、福利厚生の手厚い大企業で申し分のないホワイトカラー職に就き、結婚して子供をもうけ、郊外に家を買うことを意味していた。」¹²とアメリカ50年代を研究したDavid Halberstamの大著*The Fifties*で述べられているように、車、テレビ、一戸建ての家、ディスカウントショップの台頭など50年代は物質偏重の時代であり、またそれが謳歌できた時代でもあった。理想的な家族像、豊かな暮らしの在り方をメディアが先導し、人々は皆、ビジュアルとして与えられる「イメージ」を求めて画一化され、購買行動へと駆り立てられていた。

ペンマーク家はまさにこの50年代を代表する中産階級の家庭であると言っていいだろう。ローダの父ケネスはまさにハルバースタムの言及にある通り、まだ家こそ購入していないものの、それを「目標としている」(10) 退役軍人である。クリスティンは結婚によって仕事を辞め家庭に入った主婦、いわゆる「良妻賢母」のステレオタイプである。一人娘のローダは、有名私立の小学校へ通い、ピアノを習い、日曜日になると教会に行く。これらペン

¹² Halberstam, preface, px より。引用は峯村利哉氏の『ザ・フィフティーズ1』を利用した。

マーク家の表象する階級は、彼らより低い階層にいるリロイの視点を通して照射されている。

He didn't live in no big apartment house with servants to wait on him hand and foot; and he didn't have no nice automobile to ride around in; he didn't have nothing to ride in but an old broke-down wreck that you couldn't even give to the junk man. He didn't have no fine clothes to wear, neither; and when he was little, he didn't go to no private school that cost a pile of money and was always giving picnics and frolics for its worthless pupils. No, sir! (Underline is added, 15-16)

リロイは私立学校の遠足にドレスを着て出ていくローダと彼女を車で送っていくモニカ、同乗するクリスティンを見て、自らの境遇との差に憤りを感じずにはいられない。

このように女性が家庭に入り郊外のコミュニティで子供を育てる中産階級の核家族が増えた50年代は、社会全体の現象として子供に対する見方に大きな変化が現れた時代である。Kincheloeによれば、家族は自分の子供を制御できなくなり、学校はより厳格に子供を縛り付けるようになった。その結果、子供の変化に対応できなくなったことは言うまでもない。一方、子供は大人を役に立たないと感じ始めたと言う。¹³ ペンマーク家のローダが通った学校もその地では有名な厳格な伝統ある学校であるが、自分たちの価値観に収まらないローダを投げ出している。6才でローダが入学した最初の学校は、ローダの「物を取る」気質を更生することができなかった。学校の精神科医は、ローダが“... the thing that was most remarkable about her was her unending acquisitiveness. She was like a charming little animal that can never be trained to fit into the conventional patterns of existence.” (37) のように飽くなき欲深さを秘めていることに気づきながらも、矯正できずに無力さを晒すだけである。二校目は学校側の厳しい審査基準に合格した子供だけが通う

¹³ Kincheloe, p162.

ことができる学費の高い有名私立学校である。学校の経営者は声高に言う。

“You must not get the impression that ours is a so-called ‘progressive’ school. We teach the niceties, even some of the elegancies, of fastidious living; but we give our pupils a solid groundwork in practical matters, too. ...We are sympathetic with the problems of children, and we operate on a basis of complete nonprejudice; ...we are convinced that such an ideal is possible only where all members of a particular group come from the same level of society, preferably a high one.” (20-21)

しかし、やはりここもローダの言動に振り回され彼女を排除することになる。表向きの退学の理由は定員を満たしたためローダの枠がない、というものであった。この学校が主催した遠足でクロードの事件が起きているため、クリスティンはローダの退学とクロードの死の関連を疑う。しかし、経営者の Octavia は、次のように退学との関連を否定する。

“Why, of course not!” said Miss Octavia in horror. “That would be impossible! An eight-year-old child mixed up in a thing like *that*? Oh, no! Such a thing never entered our minds.” (68)

「まさか8才の子供がそんなこと（殺害）をするはずがない」と、全く真実が見えていない。実は、オクタヴィアはそれまで様々なローダの問題、嘘をつくことや同級生の子供たちから恐がられていることに気付いていた。しかし、それらの気づきが生かされることはなかった。結局、母クリスティンはローダの退学に明確な理由を聞き出すことなく、ローダは学校から、社会から見放されるのである。

ローダが毎週通っている教会も彼女の精神に何ら教育的な効果を与えていないばかりか、ローダを取り巻く近所の大人たちも本質を見抜くことはできない。教会の教師は皮肉にも、クロードが殺害された週に行われたレッスンで、ローダに「勤勉さ」と「敬虔さ」の証として金の蝶のカード12枚目を与

え、その褒美として本をプレゼントする。同じアパートの上階に住むモニカはもちろん、ローダの世話をしてくれる Forsythe 夫人にとってもローダは「古風なかわいい女の子」でしかない。ローダは先入観に囚われている大人を「軽蔑」(180)し、自分の欲求のために大人の望む言葉を並べ、彼らを巧みに操っているのである。

このように社会がローダを見抜けない状況によって、家庭にその責任が重く押し掛かる。50年代においては、父というより、むしろ、家庭を守るべき「女性」にその役割が重くかかっていた。ハルバースタムは郊外に暮らすようになった女性たちの世界について、

The move to the suburbs also temporarily interrupted the progress women had been making before the war in the workplace; for the new suburbs separated women physically from the workplace, leaving them at least for a while, isolated in a world of other mothers, children, and station wagons. (Underline is added.)¹⁴

と「孤立」という言葉を使って表現している。Spigel もまた「女性は子供の世話係でなければならぬ」という概念が、“her confinement to the domestic sphere”（「幽閉」）を助長したと主張する。¹⁵ この孤立無援の状態は、子供に対する「畏怖」へと繋がるが、それはクリスティンのローダに対するものと通じるものである。

クリスティンは、母にかわいらしく甘えた「仕草を見せる」ローダに幾度となく“never be quite domesticated”（9）なペットとしての動物のイメージを重ねて見ている。特にローダの動物性はその「舌」が特徴的である。彼女の舌はピンクで先が尖っていて「ちょろちょろと」（8, 9, 92）出し入れされる。特にリロイを殺害する場面で、火の中から助けを求めるリロイを横目に、アイスクリームを齧ってなめているローダの「舌」は、蛇の舌と相

¹⁴ Halberstam, p143. また50年代の女性の抑鬱とその反動としてのフェミニズムの動きについては39章に詳しい。

¹⁵ Lynn Spigel, p112.

違う。¹⁶

Rhoda's pink darting tongue touched her treat for a final time; then lifting her head, pressing her palms together, she laughed the lovely, tinkling laugh of childhood and said, "You're silly." (194)

また、ローダの「残虐性」について、クリスティンは旧約聖書との類似を見出している。

Rhoda has some strange affinity for the cruelties of the Old Testament. There's something as terrible and primitive about her, as there is about them. (177)

クリスティンの子供に対する「恐怖」は、いわゆる、社会との隔絶によって強調され、また、それは社会が求める夫を支える良妻賢母像の犠牲の産物でもある。それは、ローダの問題を一人で抱え込み、単身赴任中の夫にも相談できずに手紙を書く姿において顕著に表れている。最初に彼女が夫に充てて手紙を書くのは、クロードの事件が起こり、学校がローダの退学を決定した後である。どうすべきかわからない、どうしようもない恐怖を告白した手紙を綴るが、夫の仕事の邪魔をしないため、仕事に専念させるために、決してその手紙は出すつもりのないことが明らかとなる。

...she knew she would not send it, for she realized how important the work he was doing was for her husband at this point in his career. ... Kenneth must go on with his work untroubled and unhindered, and she must go on with hers as best she could. The problem of Rhoda was

¹⁶ Jen Baker は論文 "William March's *The Bad Seed* and the Human Propensity for Violence" (<http://www.inter-disciplinary.net/at-the-interface/wp-content/uploads/2012/08/bakermonpaper.pdf>) の中でローダと動物のアナロジーについて言及し、ローダの「人間性」を脱構築するマーチの "successful attempt" であると指摘している。

basically her problem, and she must solve it. (Underline is added, 83)

次の手紙は、ローダが隠し持っていたクロードのメダルを発見した後である。この時、ローダはメダルを手に入れた経緯について巧みに嘘をつき、クリスティンは究極的な真実を得るには至らず、漠然とした恐怖に苛まされている。手紙の内容は精神的に打ちのめされ、決して読まれることのない「届かない」心の叫びが表れている。

My emotions deep down are disturbed and powerful. They are stirred up now, and I must struggle to get them under control once more.

I miss you so badly. ...come back to me! My darling, come back to me! Please come back to me quickly! (108)

出すつもりのない3枚目の手紙は、クロード殺害の真実を知った後に書かれる。今や彼女は不安と「絶望」の淵で戸惑い、しかしそれでもまだ、ほんの少しの希望にすがっている。

...at this moment, she said, she wished that she did not know, that she could go on believing, in spite of her average common sense, in the off-chance of her child's innocence. ...perhaps such a thing would not happen again, not that she knew what Rhoda had done, and Rhoda was aware that she knew. But no matter what the little girl was now, or became in future, she was going to protect her. ... It was her duty to protect her child. (Underline is added, 148-49)

真相が明らかとなった今、自分が見張りさえすれば、二度とこんなことは起こらないだろうと考える。警察に頼るべきか、更生施設に入れるべきか悩んだものの、夫の家族の対面を考えるとどちらも現実的なものではなかった。そして、子供を守るのは自分だと決心した矢先に、リロイがローダによって殺害されてしまった。孤立によって助長されたクリスティンの盲目性が生

み出した悲劇である。

4枚目の手紙は、クリスティンが自分の出生の秘密を知った後に書かれる。自分の母親が連続殺人犯であり、ローダはその孫であった。手紙には、子供の責任は自分一人のものであると決心し、秘密を明かさぬ決意が書かれている。彼女一人に責任と不安が重く押し掛かっている様子は、モニカの視点を通して描かれている。

I don't know what's come over Christine lately. I'm concerned about her, and I may as well confess it. Christine was always so careful about her person, but I don't think she's had her hair or nails done in a month. She's beginning to look gaunt and seedy. (175)

マーチは精神的に追い込まれていく個人を描くことに卓越していると Routh が指摘するように、『悪い種子』にはクリスティンの崩壊していく精神状態が克明に描かれている。ローダの秘密を知りその恐怖に精神的平静を保つことができなくなっていくクリスティンの姿は、まさに50年代の女性の抱える恐怖、閉塞感とうまく重なり合ったのではないか。究極の悪にどのように対峙するのか、マーチは一個人の限界を描くことによって、家族の在り方、延いては社会の在り方に疑問を呈したと言える。ローダを取り巻く社会、いわゆる家庭（主婦）に子育ての責任が求められるようになった閉塞的な核家族社会を通して、悪を見つめようとしぬ盲目な社会を鮮明に描き出した。作品はローダという具体的な個を通して、50年代以降の子供をいかに育てるかという家庭のあり方、社会の在り方に警鐘を鳴らすと同時に、盲目性を超えて、常に近くに暴力が存在することを「自覚する」重要性を読者に問いかけているように思える。

ジョンソンは1959年、文学で扱われている若者世代の「神話」を次のように看破している。

It questions tradition, distrusts institutions, and wistfully dismisses

family, nation, and God as frames of reference. Its tone by definition is pessimistic: man (or half-man) must suffer and without much hope of reward or even understanding why he suffers. The cardinal virtue is endurance—not faith, hope, or charity; and our chief human comfort is that all the other human atoms are wandering in the same mazy motion. (Underline is added)¹⁷

まさにこれは、マーチ自身の人間に対する見解に共通する。「盲目な」国家も組織も宗教も伝統も何も役に立たない。個は迷走しながら希望を持たず、ただ耐え忍ぶだけである。この“endurance”については、マーチが書き溜めた寓話集 (*99 Fables*) に収められている“man and his natural enemy”という短い物語が端的に表現する。

要約すると以下の通りである。「教師が言った。人間はすべての動物の最上位“superiority”にいる。何物も我々を捕って食べたりしない。天敵はいないのだ。まさにその話の最中、教師と生徒の目の前で、所有主から逃げ出した奴隷が群衆に追われ、捕まって八つ裂きにされた。人間が最上位だと言う証明は何かと疑問を投げかけた生徒は、それを見てただ言葉を失うだけだった。」つまり、人間の敵はまさに人間なのだ。すぐそばに存在する。それを自覚して生きるより他ない。

¹⁷ Johnson, p10.

(参考文献)

- Cowley, Malcolm. *The Portable Faulkner*. Revised and expanded ed. New York: Penguin Books, 1977.
- Faulkner, William. *Sanctuary*. 1931. Renewed ed. New York: Random House, 1958.
- Going, William Thornbury. *Essays on Alabama Literature*. Studies in the Humanities. Vol. no. 4. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1975.
- Gwynn, Frederick L. and Joseph Leo Blotner. *Faulkner in the University*. New York: Vintage Books, 1959.
- Halberstam, David. *The Fifties*. 1st ed. New York: Villard Books, 1993.
- Jackson, Chuck. "Little, Violent, White: *The Bad Seed* and the Matter of Children." *Journal of Popular Film & Television* 28.2 (2000): 64-73.
- Johnson, James William. "The Adolescent Hero: A Trend in Modern Fiction." *Twentieth Century Literature* 5.1 (1959): 3-11.
- Kincheloe, Joe L. "The New Childhood: Home Alone As a Way of Life." Ed. Henry Jenkins. *The Children's Culture Reader*. New York: New York UP, 1998. 159-177.
- March, William. *The Bad Seed*. 1954. 1st Ecco pbk. ed. New York: Harper Collins, 1997.
- *99 Fables*. 1960. Ed. William T. Going. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1988.
- Meriwether, James B. and Michael Millgate. *Lion in the Garden: Interviews with William Faulkner, 1926-1962*. 1968. A Bison Book. Lincoln: U of Nebraska P, 1980.
- Nash, Ilana. "Teenage Detectives and Teenage Delinquents." Ed. Catherine Ross Nickerson. *The Cambridge Companion to American Crime Fiction*. Cambridge: Cambridge UP, 2010. 72-85.
- Routh, Michael. "The Fiction of Pressure: William March's Short Stories." *Mississippi Quarterly* 36.2 (1983): 105-115.
- Simmonds, Roy S. *The Two Worlds of William March*. Tuscaloosa: U of Alabama P, 1984.
- Spigel, Lynn. "Seducing the Innocent: Childhood and Television in Postwar America." Ed. Henry Jenkins. *The Children's Culture Reader*. New York: New York UP, 1998. 110-135.
- ハルバースタム、デイヴィッド 『ザ・フィフティーズ 1』 峯村利哉訳 (ちくま文庫、2015)
- 宮内 妃奈 「21世紀に読む William March—もう一人の『失われた世代の作家』」『福岡女学院大学短期大学部紀要 (英語英文学)』 51 (2015) : 17-29